

Some Attempts on tuition of Kana calligraphy A, B, C, D : Active learning Approach

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-12-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: MORIKAWA, Fumiyo メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4068

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



仮名書法 A・B・C・D における授業展開の工夫

—アクティブ・ラーニングを軸として—

Some Attempts on tuition of Kana calligraphy A,B,C,D : Active learning Approach

学芸学部 国文学科 非常勤講師
森川 史実代 Fumiyo MORIKAWA

要旨：学習者が意欲的に学習に取り組むためには、指導者が「より良い授業、魅力的な授業」を目指して授業改善を図ることが必要である。「どんな授業が求められ、学ぼうとする意欲の出る授業とは」ということを考えた時、従来の講義形式のように指導者が教えることに重点を置くより、学習者が自ら考え、主体的に参加するアクティブ・ラーニング型の授業が効果的ではないかと考える。自己評価や相互評価を繰り返すことで、自分の考えを発表し、人の考えを聞いて違いを整理するきっかけになり、自己の課題もみえ、追求力も向上する。どこが問題なのかということが意識できた上でする練習と、何となくする練習では、取り組み方が違ってくる。アクティブ・ラーニング形式の授業は、思考力・判断力・表現力を伸ばし、学びがより深くなる授業と言える。

キーワード：主体的活動、分析的鑑賞、臨書

はじめに

仮名書法を受講する者の中には、高等学校での芸術科目で書道を履修していない者もいる。また、高等学校で履修していても、仮名書法はあまり取り扱われず、受講生のほとんどがゼロからのスタートといっても過言ではない。そのような中で、段階的に継続して学べるように指導計画を立て、学習者が自ら考え、主体的に参加するアクティブ・ラーニングを軸とした授業展開の工夫を提示したい。

1. 指導計画

書を学習するにあたって、臨書は不可欠な学書法である。書道辞典によると、臨書とは

「書の古典を学ぶこと。技法的に、形式的にすぐれた内容を持っている筆跡（古典）を学ぶことによって、①鑑賞の深化の面、②技法修得の面、③書作の原理・方法を修得する面で、創作活動への自己の成長をはかる。(以下略)」¹

とある。

このように、書の学習の対象となる古典（仮名では古筆と言うことが多い。以下古筆と言う）を学ぶ方法として臨書と鑑賞がある。普遍的に評価の高い古筆の魅力を追求することを目標にした指導計画は次の通りである。

1. 1 仮名書法Aの指導計画

小字仮名の書法についての基礎・基本の定着を図る。

○授業の到達目標

古筆の代表作である「高野切第三種」の学習を通し、以下の3つの目標達成を目指す。

- ・小字仮名の書法を習得する。
- ・原寸による臨書ができる。
- ・古筆の書風を基にした表現ができる。

○テキスト

書道技法講座18「高野切第三種」(二玄社)

○授業計画

- | | |
|-----|--|
| 1 時 | 「仮名」を学ぶにあたってのガイダンス
古筆とは？高野切本古今和歌集とは |
| 2 時 | 小字仮名の書法を学ぶ(いろは単体) |
| 3 時 | 小字仮名の書法を学ぶ(いろは単体) |
| 4 時 | 小字仮名の書法を学ぶ(変体仮名) |
| 5 時 | 小字仮名の書法を学ぶ(変体仮名) |
| 6 時 | 小字仮名の書法を学ぶ(2字連綿) |
| 7 時 | 小字仮名の書法を学ぶ(2字連綿) |
| 8 時 | 小字仮名の書法を学ぶ(3字連綿) |
| 9 時 | 小字仮名の書法を学ぶ(多字連綿) |
| 10時 | 原寸による臨書を行う
字間の変化・線の太細の変化をとらえる |
| 11時 | 原寸による臨書を行う
文字の組合せによる表現法の違いを考える |

- 12時 原寸による臨書を行う
行のうねりを考える
- 13時 原寸による臨書を行う
墨量の変化による表現効果を考える
- 14時 原寸による臨書を行うとともに、短い語句を「高野切第三種」の書風を生かしながら表現する。
- 15時 原寸による臨書を行うとともに、短い語句を「高野切第三種」の書風を生かしながら表現する。
まとめ

1. 2 仮名書法Bの指導計画

各古筆の臨書を通し、仮名特有の「流動美」や「変化の妙」について考える。

○授業の到達目標

「関戸本古今集」を中心に、行書きされた様々な古筆を通し、以下の目標達成を目指す。

- ・各古筆の書写形式や書風・連綿等の特徴を理解し、小字仮名の多様な表現ができる。

○テキスト

書道テキスト第9巻かな

大東文化大学書道研究所編 (二玄社)

○授業計画

- 1 時 「仮名書法B」を学ぶにあたってのガイダンス
「関戸本古今集」に学ぶ (単体)
- 2 時 「関戸本古今集」に学ぶ
特徴・連綿法を考える
- 3 時 「関戸本古今集」に学ぶ
- 4 時 「関戸本古今集」に学ぶ
- 5 時 「関戸本古今集」に学ぶ
- 6 時 「曼殊院本古今集」に学ぶ
- 7 時 「曼殊院本古今集」に学ぶ
- 8 時 「針切」に学ぶ
- 9 時 「針切」に学ぶ
- 10時 「針切」に学ぶ
- 11時 「香紙切」に学ぶ
- 12時 「香紙切」に学ぶ
- 13時 「本阿弥切」に学ぶ
- 14時 「本阿弥切」に学ぶ
- 15時 「本阿弥切」に学ぶ
まとめ

1. 3 仮名書法Cの指導計画

「寸松庵色紙」の臨書を通し、仮名における「変化と統一」について考えるとともに、「背臨」を行うことで、古筆に学ぶ意義をも考える。

○授業の到達目標

三色紙の中の一つ「寸松庵色紙」の学習を通し、以下の2つの目標達成を目指す。

- ・「寸松庵色紙」の臨書を通し、連綿の特徴や運筆のリズム・間(ま)を身につける。
- ・仮名における「散らし書」について理解する。

○テキスト

日本名筆選12 「寸松庵色紙」 (二玄社)

○授業計画

- 1 時 「寸松庵色紙」を学ぶにあたってのガイダンス
「寸松庵色紙」と「高野切本古今集」との違いを考える
「散らし書」の形式を知る
- 2 時 「寸松庵色紙」の運筆の特徴を考える
- 3 時 「寸松庵色紙」の連綿の特徴を考える
- 4 時 「寸松庵色紙(わがせこが)」に学ぶ
- 5 時 「寸松庵色紙(わがせこが)」の背臨を試み、背臨の意義を考える
- 6 時 「寸松庵色紙(むめのかを)」に学ぶ
- 7 時 「寸松庵色紙(むめのかを)」に学ぶ
自己評価及び相互評価を行い、自らの書法上の課題を明らかにする
- 8 時 「寸松庵色紙(あきはぎの)」に学ぶ
- 9 時 「寸松庵色紙(道しらば)」に学ぶ
- 10時 「寸松庵色紙(しらゆきの)」に学ぶ
- 11時 「寸松庵色紙(秋のつき)」に学ぶ
これまでの学びをもとに、色紙における構成を考える
- 12時 「寸松庵色紙」をもとに、創作の手法を学ぶ
- 13時 「寸松庵色紙」をもとに、創作の手法を学ぶ
- 14時 「寸松庵色紙」をもとに、創作の手法を学ぶ
- 15時 「寸松庵色紙」をもとに、創作の手法を学ぶ

1. 4 仮名書法Dの指導計画

仮名書法の総括的な授業ととらえ、多様な仮名書法を学ぶとともに、様々な古筆のリズムを生かした小字仮名表現に挑戦する。

○授業の到達目標

「継色紙」や「西行の書」の学習を通し、以下の2つの目標達成を目指す。

- ・「継色紙」や「西行の書」の書風を理解し、表現できる。
- ・選択した古筆の書法を理解し、倣書作品を作ることができる。

○テキスト

書道テキスト第9巻かな

大東文化大学書道研究所編 (二玄社)

○授業計画

- 1 時 「仮名書法D」を学ぶにあたってのガイダンス
「継色紙(やまさくら)」に学ぶ
- 2 時 「継色紙(やまさくら)」に学ぶ
- 3 時 「継色紙(こひしさに)」に学ぶ
- 4 時 「継色紙(こひしさに)」に学ぶ
- 5 時 「継色紙(おほそらの)」に学ぶ
- 6 時 「継色紙(おほそらの)」に学ぶ
- 7 時 「継色紙(なつのよは)」に学ぶ
- 8 時 「継色紙(なつのよは)」に学ぶ
- 9 時 「中務集」(伝西行筆)に学ぶ
- 10時 「中務集」(伝西行筆)に学ぶ
- 11時 「中務集」(伝西行筆)に学ぶ
- 12時 選択した古筆に学ぶ
- 13時 選択した古筆に学ぶ
- 14時 古筆の特徴を生かした倣書作品に挑む
- 15時 古筆の特徴を生かした倣書作品に挑む

2. 授業展開例

2. 1 「仮名書法A」における第11時の展開

教材 テキスト p.62

導入

前時の復習

敷き写しを行い、字間の変化・線の太細の変化を確認する。

本時の目標(文字の組合せによる表現法の違いを考える)を聞く

展開

2種類の「なみだなりけり」の表現法について考える。

文字数は同じであるが長さに違いは感じられるか。

「なみ多那りけ利」の方が長く見える

実際、計ってみると長さにさほど差はない。

なぜ、長く見えるのかを考える。

・字形が違うから

・連綿の線が下向きだから

・偏と旁が違うし、形も違うので大きさが違って見える。

・連綿線が下向きのものが多く、「那」「け」自体も縦長だから長く見える。

・「なり介利」は横画が多いのに対し、「那りけ利」は縦画の方が多いので長く見える。

・「那み多なり介利」は全体的に文字が小さいため短く見え、「なみ多那りけ利」は偏と旁のある文字があるため長く見える。

・「那み多なり介利」は「多」から文字が小さいため短く見える。

・連綿のつながりが違う。

(斜体部は学習者の発表意見)

使用している文字は7文字中1文字しか違うだけであるのに、文字の組合せにより見え方が異なることを確認する。

表現法の違いを意識しながら臨書する。

本時のまとめ

横画は横の広がり、縦画は縦の流れを表現することができ、組合せにより、多様な表現ができることを確認する。

2. 2 「仮名書法C」における第7時の展開

教材 テキスト.p.3

導入

前時の復習

敷き写しを行い、分析的鑑賞でとらえたポイントを確認する。

展開

ポイントを意識して臨書する。

臨書した作品を自己評価する。

自己評価を踏まえ臨書する。

学習者で作品を交換し相互評価をする。

- ・ 行の長さが足りない
- ・ 回転の大きさが捉えきれしていない
- ・ 行が傾きすぎている
- ・ 線の太細の変化がない
- ・ 行間が狭く感じる

(斜体部は相互評価での意見)

相互評価での意見を踏まえ臨書を繰り返す。

「敷き写しをし、各行の書き出す位置は同じであるのに、行間が狭い感じがするのはなぜか」との疑問が学習者から出てくる。その解決のために、以下の方法で検証し、行間について考える。

- ・ 全体に線を太くして敷き写しをする
- ・ 全体に線を細くして敷き写しをする
- ・ 墨の量を多くして敷き写しをする
- ・ 墨の量を少なくして敷き写しをする

4つの方法での敷き写しで、行間に違いがあるか考える。

・ 線が太かったり、墨の量が多かったりすると、行間が狭く、その逆ならば、行間が広く感じる。

本時のまとめ

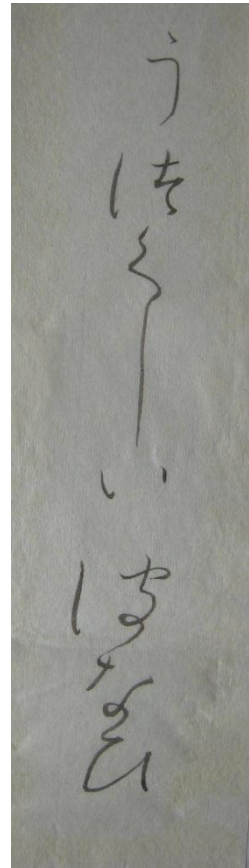
自己評価や相互評価で、対象となる作品をより深く鑑賞できることを確認する。また、他者からの評価で、自分にみえていなかったものにも気づくことができることを確認する。

行間の検証でわかったように、書の表現には線の太さや墨の量等、いろんな要素が絡まり、その絡まり方により多様な表現ができることを確認する。

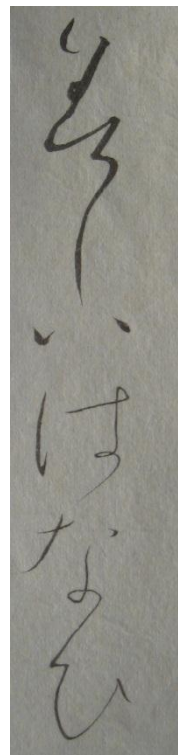
3. 成果

3. 1 「仮名書法A」における学習者の作品

臨書での学びを基に「高野切第三種」の書風を生かした短い語句の作品の一部を、表現意図とともに次に示す。



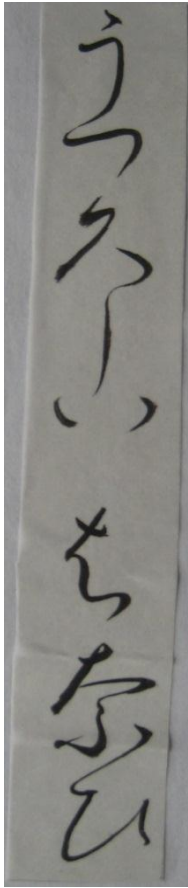
「うつくしい」の部分はきれいに、「はなび」の部分は大きく目立つようにしました。そのために、「つ」と「く」の間を広くして「い」でしめました。「つ」は「徒」の方がびしっときまるように見えたのでこの字を選びました。「は」を「波」にしたのは、花火は夏のイメージだからです。「な」を「那」にすると縦の線が多くてすらっと見えてしまうと思って、花火のイメージと合わないので、「な」にしました。



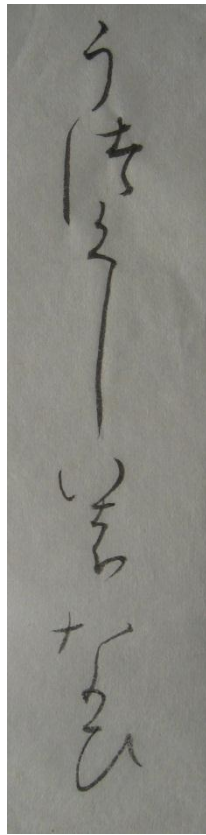
私は美しいという字を主張したかったので漢字を使い、線も太めにし、「はなび」は線を細くして、花火の一瞬で終わるはかなさを表現してみました。

3.2 「仮名書法C」における学習者の作品

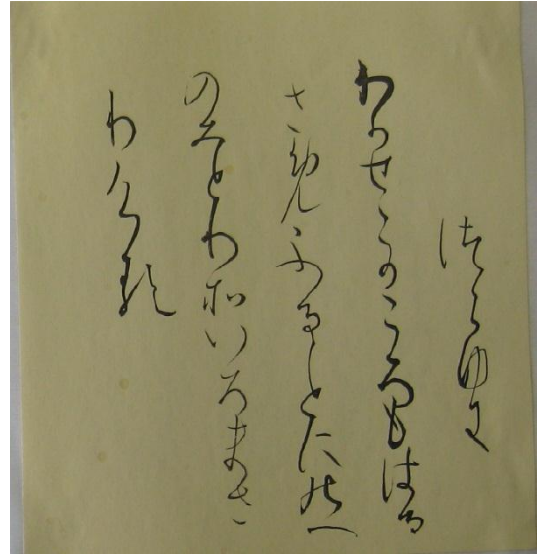
自らの課題を明らかにし、その改善に努めた臨書作品の一部を、次に示す。



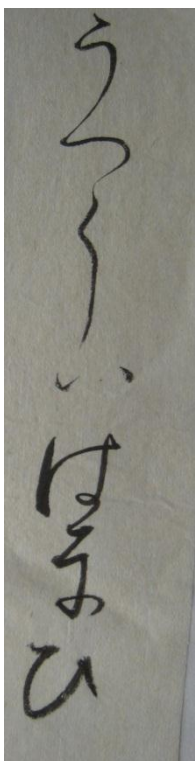
「はなび」の3文字は、ゴージャス風にしたかったので、なるべく変体仮名を使ってみた。



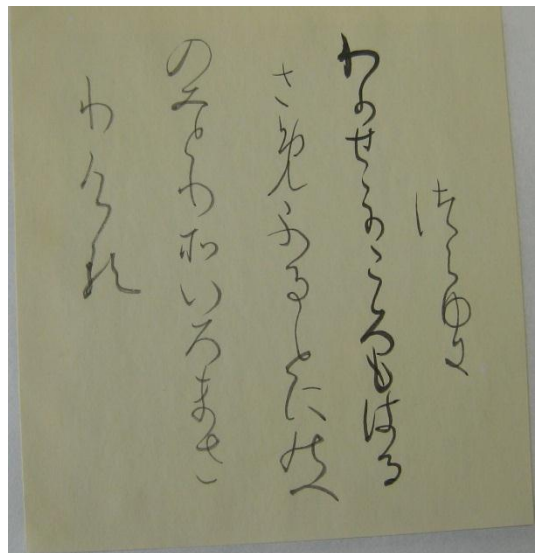
文字と文字の間隔に変化を付けることを意識してかきました。



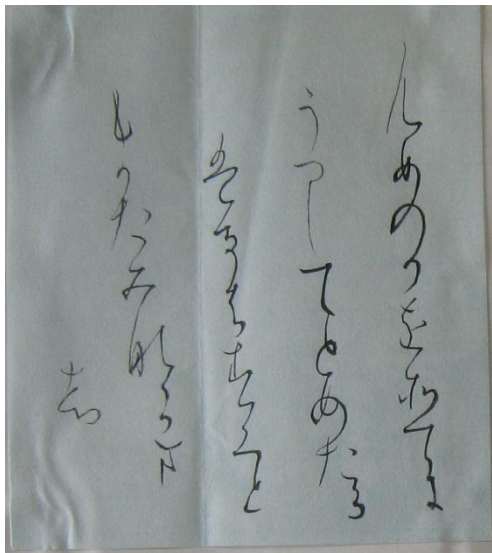
- ・余白を意識して書きました。
- ・回転の大きさや「みと利」などはリズム感のある回転を表現しようと心がけました。
- ・文字を平にし、行間に気をつけました。



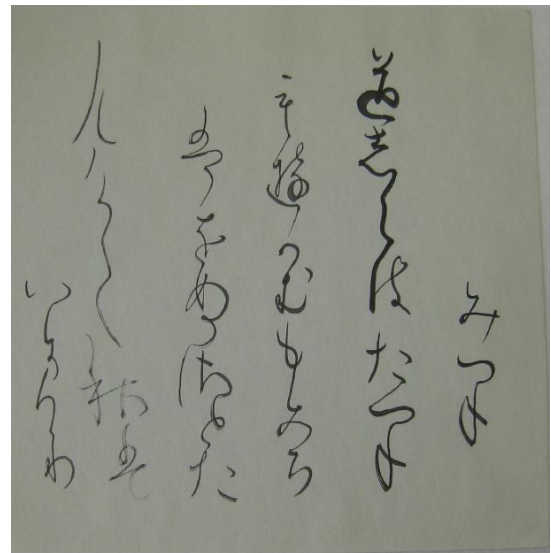
「うつくしい」という言葉は、はかない感じで表現し、「はなび」の字は迫力を付けてみました。特に「奈」のあたりを力強く表現しました。



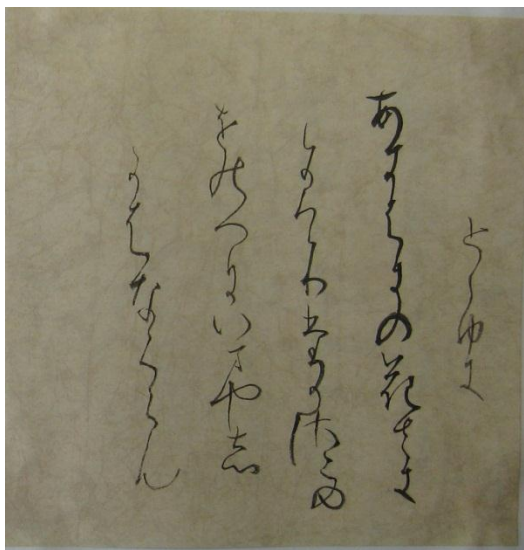
- ・行が左に流れてしまうという課題があったので、左に流れないように注意しました。
- ・文字一つ一つの傾きを意識しながら、文字の中の空間も意識しました。
- ・動きが小さいと指摘があったので、一つの文字の動きを大きくするようにしました。



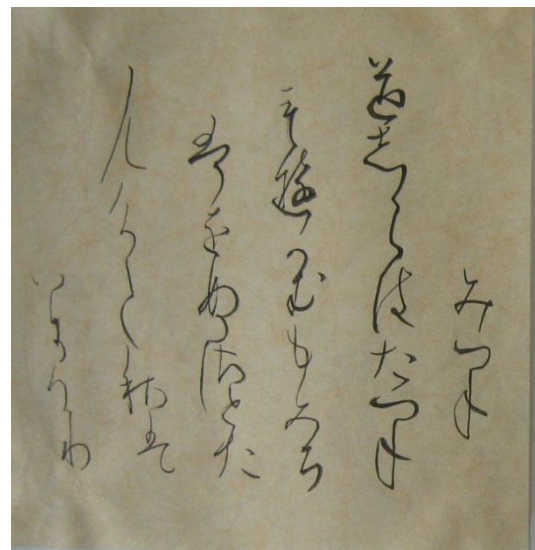
- ・「てとめ」の左回転の動きを大きくするように心がけました。
- ・3行目が傾いていないことが多かったので、動きを意識しました。
- ・4行目が傾きすぎないように、「み那」の連綿線の方に注意しました。



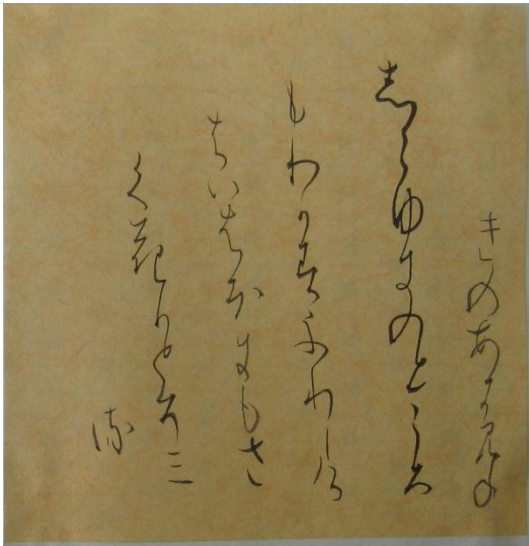
- ・全体の文字の位置関係や、大きさ、動きに注意して書きました。
- ・2行目の筆圧を考え直しました。
- ・二つの「つ年」の筆使いの違いを考えました。
- ・行間や行の傾きを意識しました。



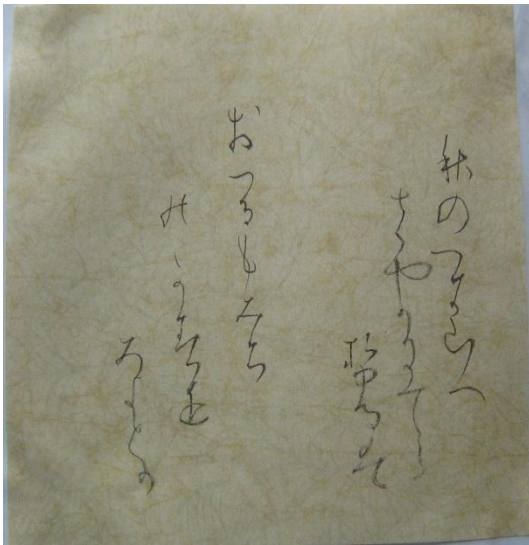
- ・3行目「こ」から「の」への動きを大きくしました。
- ・「可佐」のところは、「ため」をもたせるという筆使いの特徴を意識しました。
- ・「や」の最終画が弱かったので、しっかり突き上げ、強さのある線を目指しました。



- ・墨量が多くなりすぎないように努力しました。
- ・4行目と5行目の行間が狭くならないようにしました。
- ・5行目、6行目は縦方向の線を意識し、行の幅が細く見えるよう注意しました。
- ・6行目、微妙な太細の変化に気をつけました。
- ・字間に注目して書きました。



- ・一文字一文字がどう傾いているか考えて書きました。
- ・「花」から下の行の動きに注意して書きました。
- ・4行目の行末が少し右に流れることを意識して、文字の上下の位置関係に注意しました。



- ・中心部分の余白が狭くなる傾向があったので、狭くならないように気をつけました。
- ・5行目の「可」、6行目の「み」が誤字とみられるような書き方をしていたので、注意しました。

おわりに

書を学ぶにあたっては不可欠な臨書であるが、「古筆を学ぶ」のではなく「古筆に学ぶ」という視点で臨書しなければならない。そのために、全体的鑑賞だけでなく分析的鑑賞を行い、学ぶべきポイントを明確にした上で臨書を繰り返すことで表現力の向上につながる。

アクティブ・ラーニング形式の授業で、自分の意見を述べ人の意見を聞くことにより、仮名書法Aにおいては、ポイントを確実に捉え、自己の表現に生かすことができた。また、仮名書法Cにおいては展開例で示したように、学習者自らの気づきにより学びが深まったといえる。

しかし、ただ「考える」ことだけを働きかけても仕方なく、考えを進めていくための環境（指導者の支援）や知識が必要である。そのためには従来のような習得型の授業により知識を得ることも重要である。今後、更なる研鑽により、知識（習得型）と思考力（活動型）の両方を大切にしながら、双方をバランス良く取り入れた授業を進めたい。

¹東京堂出版 飯島春敬 編 「書道辞典」